

保育者に必要な自然とのかかわり

そのⅠ．東京家政大学キャンパスにおける植物資源を使った草花遊びの可能性

児童学科 佐藤 英文

1. 教育指導要領等に見る子どもが自然とかわることの重要性

子どもの成長にとって自然が重要な環境要因の一つであることは幼稚園教育要領（2008）、保育所保育指針（2008）、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（2014）の領域「環境」にも明確に述べられている。自然の重要性に関する記述内容は、いずれもほぼ同じである。例を幼稚園教育要領に取ると、「環境」にあげられた「ねらい及び内容」11項目の中で、とくに自然とかわることの重要性について述べた主な箇所は以下に示した7項目の部分である。

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- (2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
- (3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- (4) 自然などの身近な事象に関心を持ち、取り入れて遊ぶ。
- (5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。
- (7) 身近な物や遊具に興味をもってかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
- (8) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。

これらのうち(1)・(3)・(4)・(5)については、生き物や自然現象と関わることの重要性について述べられている。これに対して(2)・(7)は自然物を含めた身の回りの物に直接触れ合うことの重要性に触れている。(8)では、(1)～(7)から抽象化される形や数、に気づくことの意義について述べられている。ところで、「自然とは何か」についての定義はなかなか厄介で難しい。しかしながら、保育という側面から考えれば、子どもの生活に密着した身近な生物・物質・景観・現象などを総称して「自然」と理解してよいであろう。日々の遊びの中で子どもが触れ合うことができる、という点を強調しておきたい。

上述したような子どもが自然と接することの重要性については、保育者を目標としている本学児童学科や保育科の学生は、授業を通してよく理解している。同様に、現場で働いている保育者たちも自然と触れ合うことの必要性をよく認識している。しかしながら、重要性を概念として理解していることと、実際に自然を体験し教育に応用できることとは、必ずしも一致しない。たとえば、保育者に対する講習会などを実施すると、参加動機に「子どもを自然の中で遊ばせたいと思うが、実際にどうしたらよいかかわからない」という感想を述べられる方も多し。また、学生に学内およびその周辺の植物について尋ねてみると、ほとんど知識を持っていないし、日ごろから身の回りの自然植生に関心を持つことが少ないことがうかがえる（佐藤2008）。動物、特にムシなどではこの傾向はより強くなり、嫌悪感を示して触れようとしなばかりか見することを拒否する学生も垣間見られる。この傾向は、布村・岡本（2009）によればムシへの苦手意識は小学校5年生あたりから顕著になるようである。しかしながら、幼児の多くはムシが大好きであり、学生たちの多くもかつてはムシには強い関心を抱いていた時期があった（佐藤2014）。

なぜ学生たちが自然に関心を持たなくなってしまったかについては、①大人になるにつれて興味が多様化する、②思春期に入ると急にムシなどを嫌悪する傾向、③学生たちが自然に接する機会が激減している、などのほかにも様々な要因が考えられる。筆者はこの中の特に③の問題を克服すれば、ある程度の改善が期待できると考えている。たとえば、佐藤・大澤（2013）は授業のはじめに「今日はどのような植物を見ましたか？」と問いかけ、自然を観ることの大切さについて訴えてみた。その結果、半期15回の授業の後には明らかに改善の形跡が確認された。しかし同時に、この方法は単に植物の名前を知ることが中

心であったため、関心が視覚的なレベルにとどまり、実際に保育現場での応用に役立てるに至っていない、という側面も認められた。

そこで、自然を活用した教育を実践する力を養うため、まず基礎資料として草花あそびに使える家政大学キャンパス内の植物資源を調査し、活用の可能性について考察してみることにした。次に、実際に学生に遊びの一部を体験してもらい、より具体的な経験を積ませる試みを行った。その結果の一部を紹介したい。

2. 調査地点と調査方法について

2-1. 家政大学内における遊び資源の調査

遊びとして使える植物資源の調査は2012年～2016年にかけて行い、春夏秋冬に随時植物名およびそれらを使ってできる遊びを記録した。したがって、今回確認したものは植物学的な視点に立った植生調査リストではないことをお断りしておく。

調査地点：東京家政大学板橋キャンパス（東京都板橋区加賀1-18-1）および同狭山キャンパス（埼玉県狭山市稲荷山2-15-1）

調査対象：調査対象とした植物は、筆者がこれまでに体験したり観察したりしたことのある「植物遊び」に利用されている自生あるいは植栽されたもの、である。植物の名称は基本的には種名を用いたが、たとえば「カタバミの仲間」や俗名「ネコジャラシの仲間」あるいは「ツバキ」、「ツツジやサツキの仲間」等の同属内の複数の種や亜種や品種を含む植物に関しては、用途が全く同じで遊びの際にほとんど区別されていない場合が多い。そのため、本稿では代表としてそれぞれカタバミ、エノコログサ、オオムラサキツツジなどの代表的なものの種名で表現し、遊びの主人公が「子ども」を対象としたものであるため学名は用いなかった。また、リストを作成するにあたっては、分類群による体系ではなく、50音順にした。なお、和名は基本的に牧野新日本植物図鑑の名称を使用した。ササ、タケ、シュロなどの仲間は樹木に加えた。新年、植物の分類体系は旧来の方法に対してAPG（Angiosperm Phylogeny Group）体系に変更されつつあるが（たとえば大橋ら2017）、ここでは旧体系を用いて分類した。

植物の調査方法：基本的な調査は2015年8～10月にそれぞれ3回（板橋キャンパス9月17日・24日・10月8日、狭山キャンパスでは9月14日、21日、28日）、敷地内を歩きながら主に子どもの遊びに利用されている植物（大人も利用）を記録した。これ等に加えて、2012年から2017年にかけて、散策しながら随時発見したものを加えていった。なお、遊びは伝統的なものからその場限りのものまで無限と行ってよい広がりを持っているためすべての植物が候補であると考えられるが、ここでは、筆者が過去に集めた伝統的な遊び（いわゆる伝承遊び）を中心にまとめた。

2-2. 学生の遊び体験調査

調査方法：調査は平成28年（2016）9月～11月を中心に実施した。本大学児童学科2年の保育内容演習「環境」の授業内で27種類の遊びを実践してもらい、これらの遊びを「過去に経験したことがあるか」「経験はないが本や映像で見たり聞いたりしたことがあるか」「初めて経験したか」の3点から1つを選択する形式で回答してもらった。加えて、これらの遊びに対する感想や意見を1～2行で記述してもらった。また基礎知識を確認するため、32種類の植物について知っているかどうかを記録してもらった（11月実施）。本調査は6クラス（児童学専攻112名・育児支援専攻119名・大学院1年1名:合計232名）を対象として実施した。それぞれの体験に対する人数は欠席、遅刻、記載漏れなどの理由により若干変動しているため、結果はすべて有効回答数全体に対する割合として集計した。また今回は、専攻別には分けなかった。

3. 結果と考察

3-1. 家政大学キャンパス内の植物と遊びの可能性

調査の結果、両方のキャンパスで合計162種類の植物（子どもの遊びが可能なもの）が確認された。そのうち、板橋キャンパスでは合計144種類、狭山キャンパスでは131種類（以下、板橋、狭山と表現）が確認された。なお、ページの制約もあるため今回は植物リストを掲載しない（次回の予定）。両者に共通したのは114種類であった。板橋のみに見られたものは22種類、狭山のみに見られたものが18種類であった。これらの中で、地域植生とみなされるものはそれほど多くはなく、どちらも移入植物が多い傾向にあった。確認された植物を使ってできる遊びの種類は、延べ350種類以上に及んだ。もちろん、遊びはどのように展開されてもよいし、その数え方に特定の制限があるわけではないので、今回の数値はあくまで無限に展開する可能性の中の一部であるといえる。

以上の結果から、板橋・狭山双方において、ほぼ年間を通じて授業に草花あそびを取り入れた授業が展開できることが明らかになった。ただし、学園の景観を保つために定期的に草木の手入れが行われるため、時期をじょうずに考慮しないと教材を得ることができない。そこで筆者は、未使用のプランターに生育した植物を手入れせずに放置し、いわゆる原っぱ的な環境を用意している。この実験結果については、稿を改めて論じることとする。

3-2. 保育者に認識させたい草花あそびの持つ多様な機能

上記に述べたように、比較的多様な植物に恵まれている本学園の環境を利用すれば、多くの遊びを学ぶことができる。そして、それらの遊びの中には幼児の五感を刺激する要素が含まれていることを、学生は実感することが可能である。たとえば、タンポポの花茎で笛を作るとしよう。最初は目を使って探す（視覚）。適当な茎を発見し、それが良い材料かどうか触れて確認する（触覚）。茎をちぎると特有の香りが漂ってくる（嗅覚）、工夫して作って口に運べば独特の苦みが舌を刺激する（味覚）。苦労してようやく音がでてその変化を楽しむ（聴覚）。この他に、適当な材料を探し歩いたり、ちぎったり、吹いたりする動作が子どもの運動機能を発達させることにもつながる。さらに、ピアノやリコーダーと違って試せばすぐに音がでるわけでもないため、あれこれ試行錯誤する中にコツをつかんだり規則性の発見などが認められ、指先の器用さも備わってくると期待される。

さらに、草花を使った遊びは、植物自体をよく観察しなくてはならないため、博物学的な発見能力を養うのに役立つ。筆者は学生に「みようとしなれないものは見えない」ことを授業の時にくりかえし語っている。つまり、自然に関心を持っていろいろなことを見ようとしなければ、森を見ても何も感じないであろう。意識的に見て、触れて、さらに遊びを通しながら観察すればそれらの過程の中に、葉っぱや木の形や色や感触、生き物たちの関係、その特徴を応用した遊び、など博物学的な発見要素が数多く詰まっていることを認識できる。そしてそれらは、後に科学的な研究に発展する可能性を秘めていると考えられる。たとえば寺田寅彦は「子供らはまたよくかやつり草を芝の中から捜し出した。三角な茎をさいて方形の棒形を造るといふむつかしい幾何学の問題を無意識に解いて、そしてわれわれの空間の微妙な形式美を味わっていることには気づかないでいた。相撲取草を見つけて相撲を取らせては不可解な偶然の支配に対する怪訝の種を小さな胸に植えつけていた。」（芝刈り）のように子どもの遊びの中に潜む科学性について鋭く洞察している（佐藤2013）。

もちろん、このような工夫や新たな遊びの発展などは、ただ子どもの自主性に任せて放置しておけばよいわけではなく、寄り添う保育者の教育力に大きく依存していると考えられる。つまり、遊びの中に潜む可能性を十分に理解して共感できる資質を養っておく必要がある。そのためには、保育者自らが遊びを楽しみながら工夫する喜びを体験することが重要であろう。本学の学生にタチアオイの鶏冠を体験してもらった例を紹介しよう。最初は鼻の上に貼りつけることだけを見本で示したのだが、学生たちは体のあらゆるところに貼りつけたり、爪に顔を描いてそこに冠のように貼ったり、中にはコガネムシをつかまえて

その背中を飾ったりしていた。このように、一つの遊びを示すと次々と展開し広めあっていく姿勢の中に、保育者に必要な資質を高めていく姿がみられる。

3-3. 保育者をめざす大学生の草花あそび体験や植物知識

それでは、幼児教育にかかわっている保育者や学生は、実際にどの程度自然と関わっているのでしょうか。その手掛かりを得るために、本校児童学科の学生にいくつかの草花あそびを体験してもらい、それらを過去に経験したことがあるかどうか調査してみた。

まず、後期2回の授業において、学生と一緒に板橋キャンパス内を歩きながら、伝統的な27種類の遊びを紹介し、実際に遊んでもらった。その後、教室に戻ってアンケート用紙を配布し、これらの遊びを過去に体験したことがあるかどうかを回答してもらった。また体験後の感想を述べてもらった。なお、これらの調査に関して、研究や授業の改善のためのみに使用し、個人名や特定のクラス名を出すことがない旨の了解を学生たちから得ている。

まず9月中心に実施した授業の回答者であるが、少ないもので37名、多いもので224名、平均168.4 ± 68.81であった。体験割合の多い順に図-1に示した。驚いたことにネコジャラシの穂を使ったくすぐり体験のない学生が4.1%存在したことである。またキンモクセイの香りのように直接触れなくとも秋になると体感できるものについても12%の学生が体験していなかった。この場合は、キンモクセイが生育しない環境で育ったか、あるいはキンモクセイの香りであることを過去に認識していなかったかのいずれであろう。体験割合が50%を超えたのは27種類中わずか5種類（全体の18.5%）にすぎなかった。10%以上をみても12種類（44.4%）であった。一部の学生は高校生の時に体験授業で筆者の模擬授業を受けたものがおり、たとえばエノコログサのキジ笛などはその体験者が含まれている。したがって子どもの頃の遊びに限定すれば、これらの結果はもう少し低い値を示すと予想される。

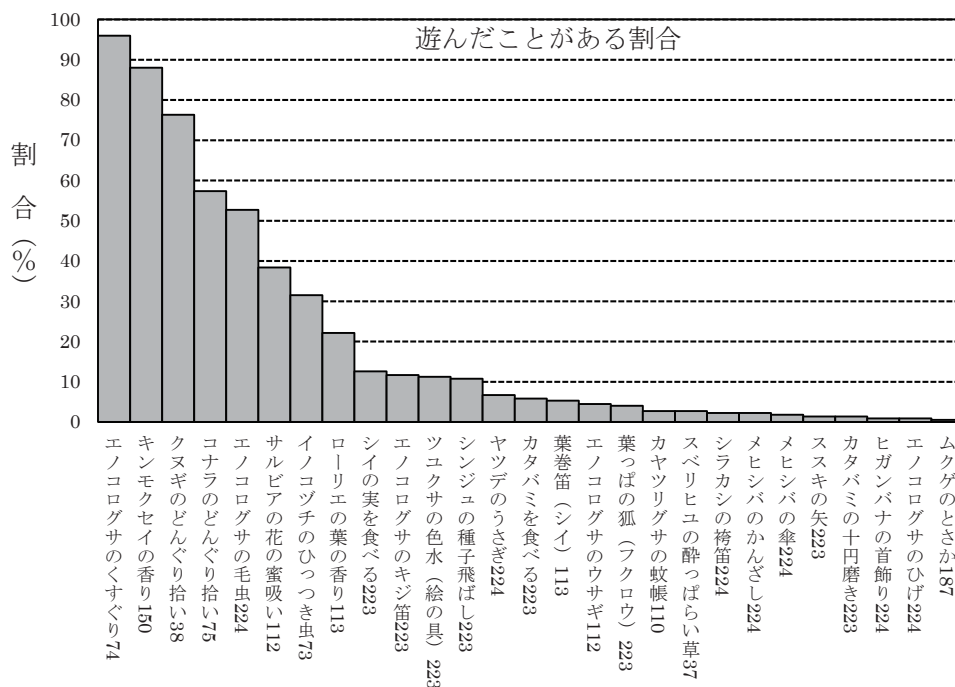


図1. 学生に体験してもらった草花あそびと過去に体験した割合（遊びの下の数字は体験者総数、棒グラフはすべて%で示してある）

次に、11月に植物観察を実施した。その際、晩秋の様々な植物の生活形を知ってもらうことと、いくつかの植物を使った簡単な遊びを紹介した。9月の場合と同様に、植物の名前やその特徴、それを使った遊びの例などを示し、体験の有無を確認した。その結果、花の咲いていないタンポポのロゼット状の葉を

知っている学生がもっとも多く、84.4%であった。次いでクローバーの葉がいわゆるハート形をしていないことを知っている割合は64%、ゲツケイジュ（ローリエ）の葉の香りを嗅いだことがある割合が58.6%などであった。興味深かったのは、唱歌「たき火」の歌詞はほぼ全員が知っていたのに対し、サザンカの花を見たことがないと答えた学生の割合が50.2%であった。その他、ヒガンバナやスイセンの花は知っていても葉を知らない、カキの実を知っていても葉は見たことがない、など身近な植物を認識していない例が多いことも明らかになった。

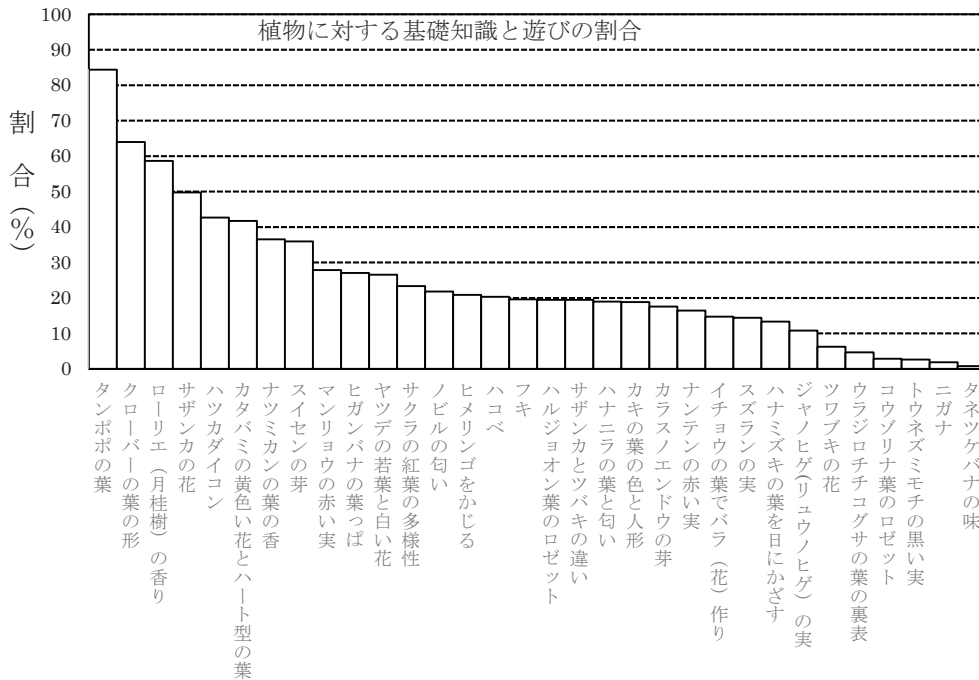


図2. 学生に紹介した植物と簡単な遊び（ここでは名前を知ることでも遊びの一つであると定義している、棒グラフはすべて%で示してある）

近年、幼稚園や保育所の保育者に草花あそびの体験講習を実施することが多いが、植物に対する知識やそれらを使った遊び体験が豊富な保育者は非常に少なく、たとえば20種類の遊びを紹介した時半数の体験を持つ者の割合は10%程度であった（未発表）。一方、幼稚園新人教諭に行った同様の調査でも、多少の差は認められるものの基本的な傾向は類似している。一方、筆者が幼稚園教諭免許更新講座を担当した際（2011）に実施した類似の調査（41名）では、遊び体験を持つ割合は年齢によって異なり、30歳代では14.2%、40歳代では17.8%、50歳代では28.6%であり、高年齢者ほど体験割合が多くなっていることが示された。このように若い世代ほど自然遊び体験が少ないことが顕著になった。

3-4. 今後の課題

以上の結果から、現代学生は植物に対する基本的な知識やあそび体験が少ないことが浮き彫りになった。現場の保育者から「草花あそびの大切さは理解しているが、どうしてよいかわからない」という声をよく聞く。自然を相手にする場合、教科書の知識を理解することと違い、現場で一つ一つ体験を積みながら熟練していかなくてはならない。つまり、授業で得た知見はほんのわずかに過ぎず、むしろそこから地道な努力をしていかないと保育者が子どもと自然をつなぐ存在になることはむずかしいといえる。

しかしながら、保育者は基本的に植物を使ったあそびが好きである。アンケート用紙に書かれた感想を見ると、

「ふだん意識していない植物でも目を向けたらこんなに遊びがあることに驚きました。」

「学内にある様々な草花でいろいろな遊びができるということに驚きました。」

「いろいろな植物を見て自分がいかに植物を知らなかったかと実感しました。」

といった初体験に対する前向きな意見や感動を述べたものがほとんどであった。同時に、これらの体験をもっと知りたい旨が述べられていた。これらの意見を総合すると、学生たちに植物と接する機会を作り、たくさんの遊びを体験してもらえば、それを保育に生かそうという意欲を育てることは可能である。

東京家政大学の板橋キャンパスは都会の中にあつて比較的豊かな自然を持っている。単に緑が多いだけでなく、多様な植生に恵まれており子どもたちが遊べる雑草や実のなる樹木も比較的豊富である（大澤2000、2001、2005）。同様に狭山キャンパスも豊かな自然に恵まれ、特に遊びに利用できる樹木が多い。今後、これらを有効に活用しながら自然を生かしたあそびが得意な保育者を育てていくことができるのではないかと考えている。現在、そのための植物調査や有用な種類の分布図および活用法などについての資料を作成中である。

4. 文献

- 大澤 力（2000）東京家政大学キャンパスにおける自然植生の現状と活用の課題 ―樹木を中心とした自然植生の検討―. 東京家政大学博物館紀要5：39-65.
- 大澤 力（2001）、東京家政大学板橋キャンパスにおける自然の整備・活用の提案 ―今後の望ましいあり方の検討を踏まえて―. Ibid.5：39-65.
- 大澤 力（2005）、東京家政大学板橋キャンパスにおける武蔵野の森の再現を目指した検討と試行. 東京家政大学生生活科学研究報告28：5-18.
- 佐藤英文（2008）短大保育課学生の植物知識に関する調査、鶴見大学紀要45（3）保育・歯科衛生編：33-41.
- 佐藤英文（2013）寺田寅彦の随筆に学ぶ ―特に科学教育観の保育への応用―、鶴見大学紀要50（3）保育・歯科衛生編：59-65.
- 佐藤英文（2016）ツマグロヒョウモンに対する苦手意識解消の試み、別冊昆虫、昆虫好きを育てるために：68-72、ニューサイエンス社.
- 佐藤英文・大澤力（2013）保育者をめざす学生に植物の関心を持たせるための工夫 ―今日はどうな植物を見てきましたか？―、鶴見大学紀要50（4）人文・社会・自然科学編：71-79.
- 寺田寅彦（2012）芝刈り、小宮豊隆編・寺田寅彦随筆集1、岩波文庫。（1921、中央公論に掲載）
- 布村昇・岡本直樹（2009）土壌動物学展アンケートに見る虫への意識について、富山市科学博物館研究報告第32号：171-176.
- 牧野富太郎（1974）牧野新日本植物図鑑：1～1060. 図鑑の北隆館.